
白虎と朱雀

大和 田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白虎と朱雀

【Nコード】

N1908G

【作者名】

大和田

【あらすじ】

百済・高句麗滅亡後の倭国では、近江に都を移した天智帝が逝去し、政権は天智の子の大友皇子が太政大臣として引き継ぎます。これを機に反近江朝廷派が大海人の皇子を中心に動き出します。当時の国際情勢を見ながら壬申の乱を描いていきます。

時代背景（前書き）

歴史においては記録されているものが全てであるが、古代史においては断片的かつ執筆者のある種の意図が記録されているものがあると思う。日本書紀は我国の正史であるが、私はこれを疑い私なりに再構築してみたい。「記録に無いから、それは無いだろう。」ではなく、記録に無いけれども、何かがあった筈だ。と考える見たいのです。

時代背景

西暦589年、漢帝国崩壊のおよそ400年後、長く戦乱にあった大陸では隋の文帝が江南の陳を滅ぼして中国を統一し東亜細亜に巨大な国家が出現した。文帝の後を引き継いだ煬帝は、東の高句麗が西の突厥と結んで隋に対抗する姿勢を見せた為に100万に及ぶ大軍を起こして3度にわたり高句麗へ遠征したが、悉く失敗して隋滅亡の端緒となった。

西暦618年、内乱により煬帝が殺されると、中原を押さえていた李淵は煬帝の孫の恭帝から禅譲を受けて自ら皇帝となった。唐の高祖である。

西暦630年、突厥を崩壊させた二世唐太宗李世民は、その後も近隣諸部族を屈服させ、内では貞観の治と後世称えられる安定した時代をつくり出した。しかし唐の東の大国、高句麗は隋滅亡の端緒になった国でもあり唐は、高句麗侵攻の機会を狙っていた。

建国以来長きに亘ってあい争ってきた半島三国、高句麗百済新羅にとっても大陸中原において巨大国家が出現したことは脅威であった。特に隣接する高句麗は、後顧の憂いを払拭するために百済と同盟関係を結んだ。同時に当時百済と同盟関係にあった倭国とも誼を通じることとなった。蘇我氏の法興寺建立の際に高句麗から送られた佛像鍍金用の黄金三百両や高句麗僧派遣もその一端であった。高句麗百済倭国の同盟関係に対し亡国の危機を迎えた新羅は、大国唐と結ぶしか生き残る方法は無かったのである。

西暦642年、新羅は百済義慈王の総攻撃を受け、大耶城をはじめ西方40余城を取られ、洛東江まで後退。時の新羅宰相金春秋は単身高句麗に乗り込んで救援を要請するも逆に捕らわれの身となって

しまった。これには何とか脱出するも、高句麗は百済と合勢して新羅の対唐通交の要衝地であった党項城（京畿道南陽）を挟撃した。西暦643年、唐の太宗は、高句麗・百済両国に使者を送り、新羅との和解を勧告。新羅と軍事同盟にあることを明らかにした。百済は受諾の態度を示したが、高句麗はこれを一蹴してしまった。

これに対し唐太宗は翌644年、およそ10万の兵力で高句麗に侵攻した。第一次麗唐戦争である。この動きに倭国でも反応があった。翌645年、大和朝廷において百済との窓口でもあり朝廷内において権力を欲しいままにしていた蘇我本宗家が、軽の皇子すなわち孝徳帝を中心とする勢力に滅ぼされるのである。これは倭国に親唐政権が誕生したことを意味した。親唐政権が誕生して先ず取り組んだことは、遣唐使の派遣と親唐派の僧旻と高向玄理の国博士の登用であった。海外の情報にいち早く接するための難波の宮の建設も必然であった。親唐とは親新羅も意味したから、新羅の宰相金春秋も早速やって来たのである。

しかし西暦651年、唐高宗は入唐した百済使臣に占領した新羅領を新羅に返還するよう和平を勧告。不履行の場合、唐は百済への出兵も辞さないと通告。及び、百済と与国関係にあった倭国に対し、新羅に対し救援の出兵を勧告した。これにより、大和朝廷内において親唐派と親百済派の対立は決定的となり親百済勢力に敗れた孝徳帝は遂に、親百済派の斉明女帝及び中の大兄の皇子により難波の宮に置き去りにされるのである。

西暦660年、百済は海を越えてやって来た唐軍と新羅軍に挟撃されて、あつけなく滅びた。

西暦663年、百済復興運動の求めに応じて渡海した倭国水軍は、迎え撃つ唐水軍に白村江において破れ、亡国百済遺民と共に海を渡ったのである。

西暦668年、唐・新羅軍、平壤城を囲む。9月、高句麗の宝蔵王が降伏することで、高句麗滅亡。

西暦670年、倭国では庚午年籍の作成が始まる。長門・筑紫、両国に築城する。

西暦671年、大友皇子が太政大臣になる。9月、天智、病臥する。

10月、大海皇子が東宮を辞して出家し、吉野に向かう。11月、

唐使一郭務& amp; #24752; 《かくむそう》ら2千余人、

47隻の船に分乗して日本に向かう。12月、天智天皇、没。

西暦672年、3月、来朝している一郭務& amp; #24752; ;

《かくむそう》ら、天智の死に哀悼の礼を捧げる

風が吹いている。

吉野にて(1)

「夢を見た。この吉野の山が、山一杯の桜に包まれている夢であった。美しい、見事な光景であった。」と大海人は言った。

春二月、吉野の山にも春は忍び寄っていたが、桜はまだ咲いていない。

「ほほう。」肯いた角乗は、目を瞑りひとしきり思案の後に口を開いた。

「桜の花は花の王と言われています。これは、皇子が必ず皇位に着く知らせです。」そう言うと、手を一つ叩き腕を組んだ。

「間違いない、間違いない。」うんうんと頷き、皇子を見た。大きく開いた角乗の目には光るものがあつた。

「もしそれが真言なら、この地に寺をひとつ寄進しよう。」と大海人は言った後で、吾にも未練があるのだなと思つた。

昨年の冬十月、大海人の皇子一行は失意の内に吉野の離宮に入った。木枯らしの吹く寒い日であつた。飛鳥嶋の宮の地より一日がかりである。総勢三十人程、菟野讚良皇女(うののすけのりみ)と草壁の皇子それに女官と舎人小者である。冬の吉野は日暮れも早い、吉野の離宮に着いたのは日も暮れかかるところであつたが、訪ねて来た者があつた。日雄角乗(ひのおのかくじょう)である。又の名を吉野の首(おび)、この吉野の地の豪族の氏の上である。

角乗は供の者に酒肴から薪炭それに夜具まで運ばせてきていた。東宮として大海人の移動であれば必ず先乗りがいて世事万端こなしてくれるのであるが、今回は違う。都落ちであつた。飛鳥嶋の宮には留守司を置いてあつたからまだ良かったが、吉野は違う。翁媪の老夫婦が庭番において居るだけであつた。斉明女帝が健在な頃に吉野の宮は何度か使われたが、ここ十数年来放置されたままだったので

ある。大海人一行は、熱い粥や酒肴に冷えきつた身体と心を慰められたのである。

吉野の生活に慣れてきた頃から、大海人は角乘に誘われる儘に吉野山のここ日雄離宮に移ってきた。日雄離宮というのは、神功皇后が建てたという伝説を持つ。代々日雄一族が管理してきた堂宇一つのものであったが、大海人は一人で過ごせるのでその気儘さが気に入っていた。吉野川を遡った宮滝にある吉野の宮まで歩いても一時ほどだったから手ごろな距離であった。

ここ吉野山から西北に下ると吉野川の流れに遮られるが、その対岸の山の中腹には聖徳太子建立と伝えられる吉野寺とも呼ばれた比叡寺があった。大化の改新の際に古人の大兄皇子が飛鳥より逃れて来て住んだ所である。この頃は役行者と呼ばれている行者が修行道場として使っているとのことであった。古人の大兄が大海人の兄、中の大兄に殺された事を考えれば、大海人は足を向けたくは無かったが、役行者と言う男には会って見たかった。

吉野にて(2)

去る10月、兄天智の帝は病重く吾を呼び出して後事を託すと申された。吾は蘇我の安麻呂より「よくよく心してお応えください。」と言われていたから兄はこの期に及んでも謀で吾を試すのかと思つた。素直に大友に位を譲りたい。其れにはなれの力を貸して欲しいと何故言えん。吾はほとほと呆れて言つた。

「吾は不幸にして、元から多病で、とても国家を保つことはできません。願わくば陛下は、皇后に天下を託して下さい。そして大友皇子を立てて、皇太子としてください。私は今日にも出家して、陛下のため仏事を修行することを望みます。」

言いながら、胸の内から涙が零れた。吾は何の為に、兄を助けてきたのか。しかし、何かが終わつて、これで良いのだとも思えた。兄が出家を許すと言つた時、正直生き延びたと思つた。母の斉明帝が生きておればこうは為らなかつた筈だと言う考えもよぎつたが、兎に角こんな所に長居は無用だつた。大海人は思い出していた。これで良いのだ。

ふかいじょうてん 不改常典とは、あらためまじきつねのり 不改常典と読む。晩年の天智の帝が頻りに口にした言葉である。

律令制と仏教の受容を鮮明に推し進めたのは聖徳太子である。当時の倭国は大陸の中原の隋唐などの国家と較べれば辺境の田舎者でしかなかつた。律令制を採用すると言つことは、法治国家となることを意味した。

戦乱の打ち続く中国北朝で考え出された富国強兵策である。法家思想を基にしたもので遠い昔に秦で採用されたものであつたが、秦の時代と違つるのは口分田の班給である。人民の一家族が食べていける

だけの土地を国家が支給するのである。律とは刑法であり、令とは政令である。帝王も庶民も律令の規定のみに縛られるのである。この制度により、北魏・北周・隋・唐と国名と支配者の変遷を経ながら北朝は遂に中国を統一したのである。

翻って倭国の状況はどうであったのか。当時の倭国では、地方の豪族と畿内の豪族の緩やかな連合の上に大王が推載されているような状況であった。犯罪などの裁きの対応は氏上うじのかみという氏族の長や地域の豪族の長が対応したが、賂の有無や近親者などへの愛憎などの恣意が入ることがあった。政治については、朝令暮改なども珍しくなかった。結局、法令に拠るのでは無く有力者の判断に任された人治国家なのである。

それでは百姓おほみたらと呼ばれた農民庶民の生活はどうであったのか。当時の倭国は古代母系制の名残が残っている状態であったから、婚姻形態は男性が女性のもとへ訪れる通い婚が普通であり、生まれた子供は母親のもとで育てられた。家産の相続は、母親の財産は娘が引き継ぎ、父親の財産は息子が引き継いだ。それについても特段の決りは無かったから親の恣意で決められたのである。

家産の無いものについての婚姻は、最初通い婚であるが子供ができると暮らしが立つ方で暮らした。所謂、家子やっこである。奴とも書くが土地を持っている者に寄生して生きていくしか無いのである。奴婢と呼ばれた者たちとは違うが、生産手段としての土地を持たぬ者たちである。家部やかへとか部曲かきへとも呼ばれた。

奴婢と呼ばれた者たちは、戦争や犯罪および借財の返済不能によりその身を落とした者たちであって、官戸や氏上もとて使役され売買の対象でもあった。

聖徳太子に派遣された遣隋使やその後の遣唐使達によりもたらされた先進文化への憧れは当時の皇族や知識人の夢でもあったのである。大化の改新以来、改革の先頭に立って進んだ天智にとって皇統の安定はもう一つの課題であった。蘇我入鹿暗殺は、古人の大兄の皇位継承だけでなく己の命の不安定さの解消でもあった。入鹿が山背の皇子を襲撃したのを見て、皇位承継の近いところにいた皇子達の恐怖は一人中の大兄の皇子だけでは無かったのである。

あらためまじきつねのり
不改常典とは、皇位の嫡子相続のことである。父から子へ、子から孫へと皇位が受け継がれて行くということである。中華王朝では既に採用されていることであったが、当時の倭国とは決定的な違いがあった。それは、官僚機構の整備であった。例え幼くして玉座に着こうとも暗愚な主君であったとしても、法令と官僚機構により守られていれば王座は安泰なのである。

庚午年籍や近江令の採用と進んできた天智の理想は、不改常典により完成するのである。入鹿に斬りつけた若き日の思いから二十六年、吾が子大友の皇子へ皇位が引き継がれることにより天智の理想は完結するのであった。大海人も納得してくれる。天智は信じた。大友と十市の子が皇位を継承すれば、吾と大海人の孫ではないか。そう信じたのである。

吉野にて(3)

邸の外で足音がする。それも大人数だ。重い足音だ。鎧の音だ。日雄離宮は囲まれた。

扉が開いた。中に入って来た武者が叫んだ。

「大海人の皇子、謀反の訴えにより同道いただきませぬ。」

大海人は、高市、草壁、と呼ばうとしたが、声がでない。

「うっ、うっ。」と呻いたところで、目が覚めた。

夢か。俺も古人の大兄の皇子のように殺されるのか。不安な気持ち
が胸を塞いだ。吉野太子とも呼ばれた古人の大兄の皇子は、出家し
た後に謀反の嫌疑をかけられて殺されている。

とその時、外で人の気配がした。

「誰だ。」と呼びながら、大海人は身構えた。

「お目覚めでしたか、多胡弥たしやが参っております。」舎人の男依およりの声
が応えた。村国連男依は大海人が最も信頼している舎人である。

「おお。」と応えると大海人は外に出た。

扉の外には、男依の脇に一人の男が控えていた。年の頃は三十にひ
とつふたつ足りないところか、鋭い目つきに尖った鼻が印象的だ。

「何時、着いた。」と大海人は聞くと、控えている男の前に片膝を
ついた。

「昨夜遅く。」と言いながら、多胡弥と呼ばれた男は大海人を見た。
大海人が肯くと多胡弥は続けた。

「山部の王様おんやまより伝言でございます。」

「山部王とな。」大海人が呟くと、多胡弥は続けた。

「新羅出兵が、九分通り決まったと皇子に伝えよと。」

高句麗が唐・新羅に挟撃されて滅ぶと高句麗遺民達は、高句麗各地
で反乱を起こした。当初反乱軍を鎮圧していた新羅は、百済の地に

熊津都護府、新羅に鷄林都護府、そして高句麗の平壤の地に安東都護府を置き、直接支配の姿勢を見せる唐の態度に反発した。また新羅を唐の属領としか見ない唐に対し国家存亡の疑いを持った新羅は、反乱軍に兵を送り唐と敵対関係に入った。

唐は西の吐蕃とも交戦状態にあり、東の高句麗のみに力を割ける状態では無かった。舵取りを誤れば隋の煬帝の例もあり、高句麗遺民と新羅の動きに手を焼いた唐の高宗は、倭国に出兵を要請してきた。これに対し天智の帝は、先の百済の戦いの際に捕虜となったり半島に取り残されていた倭国の兵の帰還を要求したのである。先ずは最終的な戦後処理を優先させたのである。

「去る十二月に筑紫の那の津へ唐使一郭務& a m p ; # 2 4 7 5 2 ; 《かくむそつ》が先の百済の戦の際の捕虜千四百名を引き連れて参つた由、年明けに筑紫の大宰栗隈王様おのみこより使いがありました。その際もたらされた高宗の親書の結論が出されたという訳ですか。」
男依が確認するように多胡弥に話しかけた。

「それでその時期は」大海人が尋ねた。

「おそらく八月になるだろうと」多胡弥が応えた。

「ばかげたことを」大海人は呟いた。

「それから」と言つて多胡弥はひと息おいた。

「御身辺の警護を厳重にするようにとの事でございます。」

「何ゆえじゃ」大海人の最も聞きたかつたことだった。

「右大臣の中臣の金殿が頻りに皇子様を亡き者にしようとする他の重臣の皆様に通きかけているとのことでございます。ただ今のところ大友の皇子様が首を縦にはお振りに成らないとのことですが、ご用心が肝要とのことでございます。」

「金めえ」腹の底から絞り出すように大海人は呟いた。事態は大海人の最も懼れている方向に展開していくのか、怒りとも恐怖とも言

える感情が湧いてきた。

近江の支配者（1）

さざなみが眩しい。比叡ひえい風も緩んできた。春は近い。

大津の宮から湖岸を歩く二人の男があつた。二人とも五十を少し過ぎてゐる。一人は薄黄の神官姿、もう一人は黒の苞を纏つた武人の格好をしている。そしてともに錦の冠を頂いていた。右大臣の中臣の金と左大臣の蘇我の赤兄であつた。

「まことに難儀なことにあいなつてきた。」金が言った。

「そうよのお」赤兄が応じた。

「太后おほきさき様の意向には逆らえぬ。」金はそういつと立ち止り、湖の霞んでゐる先を見つめた。

昨年の夏に唐の使者は、半島に出兵して唐に敵対する新羅を討つよう要請してきた。天智の帝はそれには先ず、先の百済救援の戦いの際に唐の捕虜となつた者たちや半島に残された者たちの返還の条件を付けた。その捕虜達が、この冬に筑紫に着いた。倭国の要求に対し、唐国は信義を持って応えたのである。

「百済救援の際には、斉明の帝が先に立つて動かれた。今回も天智の帝がご存命であれば、吾らの荷も少しは軽かるうに。」赤兄も湖の遠くに眼をやつた。

「せめて鎌足殿が居てくれたらと思う。儂には荷が重い。」金が呟くように言った。

「鎌足殿であれば何とされるか、吾も考えて見た。鎌足殿は、成るようにするのじゃ。と良く言つておられたが、そこが難しゅうござる。」と言つて赤兄は金の眼を見た。金も弱く笑つた。

天智の殯が済んでもここ近江の都では、何も決まっていけないのであ

る。大友の皇子が太政大臣の職責にあり政権の中核にあることは間違いないが重大な事案の決定は、大后である倭姫の承認が必要なのである。

用明天皇の時代に伊勢の斎宮を置いたのを最後に、この国では神事については大后が担ってきた。推古女帝から皇極・斉明女帝がそれであり、天智の時代は妹でもあり孝徳帝の後でもあった間人皇女が大后を務めた。

神事の大后・女帝と政治の男王の組み合わせによりこの国は動いているのである。推古女帝と聖徳太子や舒明帝と皇極女帝、孝徳と斉明の組み合わせがそれである。間人大后亡き後に大后に立てられたのは倭姫である。孝徳帝を難波の宮に置き去りにできた権威とは、大后であり皇祖母すめみおや呼ばれた前の大后としての斉明の権威によってであった。

大友の皇子が即位する為には、この大后の権威に追いつき追い越すことが必要であった。聖徳太子が即位しなかったのは推古女帝の寿命の長さ、この権威の故であった。大友の皇子にとっては、父天智の大后の倭姫は実母以上の母としての権威に包まれていたのである。大海人が「皇后に天下を託して下さい。」と天智に釘を刺しておいた狙いは、実はここにあった。

近江の支配者(2)

もう辺りは暗い。邸に戻った金の気持ちは晴れない

《鎌足殿が亡くなられたゆえ儂が推載されて氏上となった。それは良い、そこまでなら良かったのだ。天智の帝は鎌足殿を深く信頼していたゆえ、中臣の後を襲った儂に右大臣などという願ってもいない高官に抜擢したのじゃ。儂は神官じゃ。神祇伯で良かったのじゃ。それだけでは無い、三十三天に誓いまで起たされておる。左大臣の蘇我赤兄にこの儂、そして御史大夫の蘇我果安、巨勢人、紀大人の五人で大友の皇子を囲んで天智の帝の詔を奉ることを誓い合つたのじゃ。》運ばれた膳の酒に杯を重ねながら思った。

《それにしても鎌足殿は不思議な御仁であつた。その話しようは穩やかで物静かその癖見つめられた者の心を蛇に睨まれた蛙のようにしてしまう処があつて何を考へているのか得たいの知れない恐ろしさがあつた。若い頃は旻博士の下で蘇我入鹿と並び称されたと言う六韜三略という書物を暗記するほど読んでいたとも言つ。儂など六韜三略など見たこともない。息子の不比等が田辺の小隅のもとで育てられて、隋唐の帝王学を学んでいるらしい。くそいまましい。》湯漬けにした飯に鮎寿司を取つた。臭い。

《この臭さが旨いのじゃ。それが何じゃ。大伴の兄弟は、吹負などは、近頃の朝廷みかどは臭い臭いなどと言ひおる。何のことかと思へば、百濟臭いと言うことらしい。確かに百濟人どもは大蒜を喰らう者が多くて儂もそう思うが、面当ての物言いとしか思へん。冷や飯でも喰らわしてやるうと思つていた矢先に病と称して倭京やまとへ引き籠もつてしもつた。もう奴らにこの朝廷での出目はない。》再び、杯をとつた。

《だが、何とかせねばならぬ。危うい。それが右大臣たる儂の勤めじゃ。このままでは、近江の朝廷みかどは、立ち行かん。大伴の兄弟の如きは、吉野の皇子を頼りにするのじゃろう。手を打たねばならん。大友の皇子は、お若い。叔父でもあり義父でもある大海人の皇子に手をかけるのは、人倫の道に反すると仰られる。確かに、それはそうだが、やらねばならぬ。それが儂の勤めだ。》酔いが回ってきた。

《たとえば、皇子の気持ちを傷つけようと天智の帝に誓った、吾の務めじゃ。》そう思う金の決意は固かった。

近江の支配者（3）

朝堂院へ向かう途中の金に御史大夫の蘇我果安が近づいてきて挨拶をすると言った。

「矢張り、予てからの計画通り決めますか。」

「それしか無いじやろつて、それでなければ時期を失する。」

二人には、それで話が通じた。いや、二人だけではない。近江朝廷の主だった者達には、現在の喫緊の課題が何であるのか通じていた。

朝堂院へ金、果安の順で入ると既に大友の皇子はじめ重臣たちが顔を揃えていた。二人は夫々に挨拶を交わし席に着いた。

「紀大人きののうぢ卿、筑紫の唐使に対する返礼の礼物の引渡しは何時ごろになりそうか。」左大臣の赤兄が口を開いた。

これに対して紀大人は、今回の捕虜の数は千四百と多いので八方手を尽くしているところであるが、凡そ五月初旬には引渡しが可能な旨を報告した。

「八月の渡海に兵船の建造は、間に合うのか。」再び赤兄が尋ねた。今度は果安が、今回の兵役では陸戦が主であり海戦が予想されない為、船は筑紫より対馬、対馬より半島へと順次廻船していけば漁船の徴用と新造船の建造で間に合う旨の報告があった。

「それでは後は、兵の徴発をいつ行つかだな。」赤兄が呟くように言った。

新羅出兵に対して大后の同意を得ていない現在、兵の徴発はできない。それが一同の懸案であった。もし大后の同意なくして兵の徴発を始めれば、近江朝廷の足元に火が着きかねないのだ。

白村江の敗戦の後の復興は未だ成されていない。特に前回兵を徴発された九州や西日本、特に漁民の生活は深刻であった。白村江の戦

いは海戦であつたから徴發された船と一緒に帰らぬ男達を失つた女達の打撃は大きかつた。敗戦から十年も経つて居ないのである。

それと同時に亡国百濟遺民の貴族達への任官は、旧来の豪族達の反感をかつている。天智の帝は昨年、大友の皇子を太政大臣に据えた折に百濟人五十余名に対して爵位の大盤振る舞いをしてしているのである。

律令制の進展にも不満を抱く豪族たちは多かつた。大化の改新後、遅々として進展しなかつた律令制の普及は皮肉にも白村江の敗戦がもたらしたものであつた。玄界灘を超えて唐や新羅が攻めて来るという恐怖に国内で危機感を共有したのである。同時に西日本各地で城砦を建造し兵を置いたことの影響も大きかつた。それまで中央政権の意向など、木で鼻を括っていた地方豪族達の目の前に中央直属の軍兵が出現したのである。

律令制というのは、公地公民ということである。それまで豪族たちが支配してきた土地や氏族の人民は国のものになるということであり、自由気儘に振舞つてきた自分たちは、国の役人になるということ事であつた。

不満の火種は国中に転がっているのである。何時、誰が前の東宮である吉野の大海人の皇子を担ぎ出すか予断出来ないのである。

新羅出兵の見返りに、唐の高宗が近江朝廷の高官の目の前にぶら下げた餌は大きかつた。高句麗の地を唐が占有する見返りとして百濟新羅の地を倭国に与えると言つのである。欽明天皇の時代に新羅に吸収された任那復興は、大王家の悲願であつた。また慣れない倭地に亡命してきた亡国百濟人にとつても祖国復興そして帰国は悲願であつた。

近江の支配者（４）

「東国からさらに二万の兵を徴発するとして、やはりふた月ばかり。それから筑紫までの移動に一月近くは必要じゃな。」と言うと赤兄は腕を組んでうつむいた。

「すると八月をもつて新羅に渡るとすれば、遅くとも五月の初めには徴発使を発しないと間に合いませんな。」蘇我の果安が応えた。

「そう簡単に倭姫様のご意向が変わるとも思えん。」紀大人が応じた。

「吾に考えがあります。」一同を見廻すと金が言った。

「八月までには、まだ日があります。五月に入れば徴発使を發して兵を集めます。ただし新羅出兵と言う名目ではなく、天智の帝の山稜を造営するという名目で兵を集めます。それまでに倭姫様を何とか説得してみますが、それでも適わぬ時は二万の兵の力で押し切ります。」

一同から集まった視線を押し返すように、金は一人ひとりの眼を見つめ返した。

「そうよのう。まだ時間はある。御陵みみさきの造営ということであれば、異論はあるまい。」赤兄は頷き、同意を求めるように一同を見た。

「それで、名分が立ちまする。」果安は、そう応じると大友の皇子を見つめた。

大友は皆の視線を感じると、軽く頷いて見せた。

朝堂院から出てきた金を待っている者があつた。金に続いて出てきた大友の皇子を見つけると深くお辞儀をして言った。

「皇子、少しおやつれではないですか。」

「何を言う。それより家刀自殿は元気か。」大友は親しげに声をか

けた。

「あれも年でございますから、あつちが痛いこつちが痛いなどと申しまして口だけは喧しゅうございます。」男が応じた。

「そうか、偶には邸の方へ顔を見せに来てくれと伝えてくれ。」そう言つと大友は、先程から脇で待っている金を見てから男に言った。「ではな。」と声をかけると大友は去つていった。

大友の皇子に一礼して見送つた男に金が声をかけた。

「大友殿、こちらへ。」と朝堂院の裏手へ招きよせた。

「皇子が東宮に移られてからなかなかお会いできる機会が無くて。」と男は言い訳がましい事を言った。

大友の村主すくり細人である。小太りだが年齢を感じさせぬ立ち居振る舞いである。日頃から鍛錬を欠かさぬ動きだと金には見えた。

推古十年、百済の僧觀勒により伝えられた奇問遁甲の術を学んだのは大友村主高聡であるが、大友村主細人はその後裔でありその術を以つて朝廷に仕えているのである。と同時に大友の皇子の乳人めのとでもあった。

大王家の皇子女に限らず有力氏族の子女はこの時代、配下の有力者の下で育てられた。ひとつには服属儀礼であり、ひとつには配下への信賴の証でもあった。皇子女の名前は養育氏族の名前や職掌やその氏族の勢力地名などで呼ばれた。大友村主は奇問遁甲の術で天智や鎌足に仕えたのであり、天智が皇子を大友村主に預けたのはその信賴の証でもあった。

「他にもない、お主に頼みがあるのじゃ。」金が辺りを窺いながら言った。

「もしいや、吉野におわす大海人様のことでは」細人は静かに問いかけた。金は再び辺りを窺いながら細人の耳元で言った。

「そうよ、それよ。」金は細人の肩に手をかけると

「謀反の証になるものであれば、何でも良いのじゃ。」静かに肯いた細人は応えた。

「皇子に仇なすとあれば、例え大海人様でも除かねばなりませんまい。」

吉野宮滝（1）

春の日差しが眩しい。遠く吉野山の山桜の白い色が新緑の中で輝いている。吉野川の清流を見ていると心が洗われるようだ。と沙羅羅姫は思った。吉野を神仙峽に見たてて吉野の宮を造営したのは祖母の齊明女帝であった。桃源郷とは、このような地であるのかも知れない。川の流れの水底まで澄んで見える。美しい。

今日も草壁と忍壁を連れて春菜摘みに出てきた。水辺の芹や道端の蒲公英、草壁は足を濡らすのが苦手のようで蒲公英を専門に採っている。早いもので、もう十才になる。先程から忍壁とふざけ合っていた草壁が菜摘に厭きてきたのか沙羅羅のもとへやって来た。

「母君、お腹が空いて来ました。もう戻りましょう。」と草壁は言つて、蒲公英の入った箆を差し出した。

「おおこれはこれは、大漁でございますな。」警護役で付いてきている舎人の大分君おおきたのきみえさか恵尺が、僅かな箆の中身を見てからかった。

「恵尺には食べさせないよ。」と言つて草壁はふくれた。

吉野の宮の前まで来ると、忍壁の帰りを待っていたのか母親のかじひめのい穀媛うらつめ娘が一才になる泊瀬部皇女を背負つて出ていた。

「お帰りなさいませ。」と言つる穀媛娘に忍壁が自分の箆を差し出した。

「これはこれは、おひたしにいたしましたでしょうか。それとも粥にいたしましたでしょうか。」と穀媛娘は聞いた。

大海人と一緒に吉野に来た后妃は沙羅羅姫と「木穀」かじつゆのこま媛娘むすめだけだった。沙羅羅姫の場合は父である天智の帝への反発と意地が大海人について来た理由である。これに対して穀媛娘の場合は大海人に求められ来たのである。身分は低いが、何事もそつなくこなす「木穀」

媛娘を見ると嫉妬の気持ち湧いてくる沙羅羅であった。

「木穀」媛娘は沙羅羅を姫様と呼ぶ。それに対して沙羅羅は「木穀」媛娘を娘殿と呼んだ。身分が違うのである。年は「木穀」媛娘のほうが二つ程上であったが、穴人臣大麻呂ししとのおみおまろという豪族の娘でしかない。それに対して沙羅羅は、先の大君天智の帝の娘であった。天智帝の娘で大海人に嫁いだのは沙羅羅だけではない。同母姉の大田皇女それに異母妹の大江皇女と新田部皇女である。

これは祖母の斉明女帝が決めたことであつた。斉明の夫である舒明帝の前には蘇我氏の血を引く大君が続いた。蘇我氏の血の入らない大君は斉明や夫の舒明帝の祖父になる敏達帝が最後であつた。推古帝の後を舒明帝が継げたのは幸運にも蘇我氏の系列に繋がる山背の大兄の皇子の頑迷さにあつた。当時の大臣の蘇我の蝦夷にとって例え聖徳太子の子であり、蘇我の血を引いていると言つても蝦夷にとつて制御不能な大君は不用であつたのである。

見方を変えるなら遣隋使を発した父聖徳太子を尊敬する山背の皇子は当時の親唐派の先鋒であつた。蝦夷は百済との外交を取り仕切る倭国側の窓口としての蘇我氏の利権の喪失を恐れたのである。百済からもたらされる最新の文物は蘇我氏を経由して倭国に振り分けられたのである。舒明帝は百済川のほとりに百済の宮や百済大寺の建設を推進したように蘇我氏の政策の協力者でもあつた。皇極もこの路線を継承したから非蘇我系の大君として即位出来たのである。

蘇我の入鹿の山背の大兄の皇子襲撃は、皇極帝の後の皇統を蘇我の本へ取り戻す為の伏線であつた。入鹿にとって蘇我の母を持つ古人の大兄が即位すれば、蘇我氏の権力は磐石のものとなる筈であつた。従兄妹でもある舒明帝に嫁ぎ、自らも皇極斉明として即位した老女

帝は、自らの皇統が引きつがられていく事を望んだ。

斉明帝は大君家の皇統が臣下である一外戚氏族の専横のために左右されているのを見て、これを防ぐ方法を見つけたのである。大君家の血統の純粹培養であった。吾が子である天智と大海人の皇子女を交互に婚すことで、外から外戚氏族が入ってこないのである。この方法であれば皇統を継ぐのは父方からも母方からも大君に繋がる者の中から選ばれるのである。

天智も大海人もこれに同意した。同意したものの、天智の嬪^{みめ}からは男子が誕生しないのである。唯一、遠智の郎女が生んだ健の皇子は早世してしまった。この他に三人の男子が誕生したが、その母親は婢母と呼ばれる豪族の娘たちだった。

吉野宮滝（2）

遠くでせせらぎの音が聞こえる。先程まで千字文の漢字を舎人の恵尺について練習していた草壁と忍壁の皇子二人が、解放されたのか外に飛び出していった。同い年の為もあり、いつでも二人一緒で何か企んでいるようだ。「木穀」かじめのこたつめ媛娘は、それでも気を使って草壁を忍壁に草壁様と呼ばせている。それでもふざけ合って、どうかすると草壁と呼び捨てにしている。それでいいのだと沙羅羅は思っている。

夫の大海人が近江の京みやこを捨てて来た以上、草壁が大君の座に着くことなど先ず無い。大友の皇子の若さから考えれば、大友と十市皇女の子が継いでいくのだろう。それであれば、ここ吉野の里でゆっくり暮らしていくのも良いと沙羅羅は最近では思えるようになった。「姫様、陽も陰って参りました。夕餉には、何を頂きましょう。」と「木穀」媛娘が声をかけて来た。沙羅羅は振り向くと言った。

「大海人様が、お戻りかどうか解かりませぬが、十市様から送られた鮎寿司を頂きましょう。」と、杯をあおる仕草をした。「そういたしますか。」「木穀」媛娘は笑顔で肯くと、炊屋かしきやの方へ出て行つた。

大海人は日雄の離宮に泊まる事が多くなつてきていて一度戻つて来ると何日も宮滝の吉野の宮を空けることが多い。気の知れた女同志の息抜きである。

ややあつて、「木穀」媛娘が駆けて来た。

「姫様、こんな物が鮎寿司の桶の中から出て参りました。」と言うと小さな短冊を差し出した。

それには、謀 金 細人 とあつた。沙羅羅には、何を書いてある

のかすぐに解かった。と同時に血の気が引いていく。座り込んで手をついた。

「誰か舎人に、これを皇子へ」と沙羅羅が言うと、「木穀」嬢娘は外へ飛び出した。

沙羅羅は、祖父石川麻呂の事件を思い出していた。右大臣であった蘇我の石川麻呂が謀殺された時に、鎌足殿と大友村主が裏で動いたと噂に聞いている。沙羅羅には誰も教えてくれぬが、鎌足殿が動いたという事は、父の天智が動いたという事であるくらい今の沙羅羅なら解かる。

事件の時は、僅か五歳だったから何も解からなかったが、母が狂い死にしたのは覚えている。祖父の石川麻呂の事も記憶にはないが、可愛がって呉れていたと言うことは聞いた。優しくした母が突然何も言わなくなつて、身重の身体で臥せっていた。

沙羅羅も姉の大田も乳母に引き取られたから、当時は何も知らなかった。弟の建たけの皇子を生んだ後に亡くなったと聞いた。建は言葉が喋れなかったから、不憫に思ったのであろう祖母の斉明帝の本で育てられた。その姉の大田も弟の建も今はもう居ない。祖父を奪い、母を奪い、父は天涯孤独となった吾から死しても猶、夫を奪うと言うのか。

叫びだしたい、狂いたい、狂っていた方がまだ良いではないか。大君というのは何なのか。せつかく掴んだ小さな幸せを、京から離れたこんな山の中へ取りに来るものなのか。怒りなのか絶望なのか沙羅羅には解からなかった。

草壁を抱きしめた。抱きしめて思った。この子だけは、誰にも渡さない。たとえ鬼神が襲ってきてても、吾が護る。

鬼の室（1）

おほきやのむまじひめ
大后倭姫の宮へ大津の皇子に漢文を教えに来ていた鬼室集斯きしつしゅうしが暇乞いの挨拶の為に庭で待っていた。倭姫が現れると膝を折り、両腕を合わせてその中へ額かぶずいた。

「大后様には、ご機嫌麗しゅうに。」

「大津の様子はどうですか。」

「大津様は、聡明なお方でございます。飲み込みがはようございませす。」

倭姫は、集斯の言葉に満足したように肯いた。

「そうであるう、天智の帝がえらくお気に入りでな、《あれは吾に良く似ておる》と仰っておいでじゃた。」

大津の皇子は、大海人に婚いだ天智の娘の大田皇女の長男である。娘の側から見れば孫であるし、弟の大海人側から見れば甥である。天智は四人の娘を大海人に婚せているから孫でもあり甥姪でもある皇子女が何人もいた。しかし長女でもある大田皇女が早世した為に不憫に思ったのか、大伯と大津の姉弟を皇后の倭姫に預けたのである。特に大津の皇子には目をかけていた。

鬼室集斯は、百済復興運動の中心的役割を演じた鬼室福信の子である。白村江の敗戦の後に玄界灘を越えてきた百済人の一人である。昨年、賜爵された百済人五十余名の一人である。小錦下となり学識ふみのつかさの頭のかみとなった。近江朝廷内の学問の最高権威であり、貴族の末席に加えられたのである。

鬼室福信は百済滅亡時の王である義慈王の従兄弟と伝えられる。百済王と同じ扶余姓であったが、百済復興運動の中で本拠とした周留城の近くの岩窟に住み、そこを鬼室と称して敵味方から懼れられた。

倭国に質として来ていた百済の王子扶余豊を百済王として冊封し送り出した天智の帝によりこの時、同時にこの鬼室の姓が賜姓されたのである。天智の帝は義侠心だけで百済復興を応援した訳ではない。唐・新羅を排除した後は、百済を倭国の冊封国とする心算であったのである。

「このまま学問を進められれば、大友の皇子様より上達されるかも知りませぬ。」百済から渡って来てすぐにその学識を買われて大友の皇子の漢籍の師となった集斯であった。

「外国の言葉であれば、子供の頃から慣れ親しむのが良いのであるう。」

「御意の通りでございます。」と集斯が応じると

「それにしても汝には、百済訛りがありませぬのう。聞く所によれば、百済人は百済人だけで寄り添い未だに倭国の者たちと打ち解けぬ者たちもいると言う。倭語も不自由な者も居ると言う。」と倭姫は、訝しげに聞いた。

「身一つでやって来た者たちばかりでございます。いまは生活するのがやっとでございます。今しばらくお時間を頂ければと存じます。」

「そうであろうか。百済に帰るつもりで居るのではないのか。」倭姫は詰問するように言った。

「決してそのようなことはありません。」少し口ごもりながら集斯は応えた。

「汝達は、倭国の官人です。もしそのような声があっても汝達が抑えてくれなければ困ります。」倭姫は続けた。

「新羅出兵などと口にする者たちも居るやに聞く。いまそのような事態になれば、この国はもちませぬ。太后として吾は許しませぬぞ。」

倭姫の父、古人の大兄が謀反の嫌疑により討たれた時には既に、彼女は乳部みぶの倭漢氏やまとあやしの元に引き取られて居て家族とは離れていたから唯一人助かった。

それから何度、自分の宿命を呪っただろう。中の大兄と呼ばれた天智の帝に婚わされた時、なにゆえ父や母の敵である男に嫁がねばならないのか。運命の皮肉に嘆きもした。

舒明帝の孫娘でなければ、天智の帝は吾を振り向きもしなかったであろう。吾は、ひたすら大君として即位することを望んだ男の飾り物でしかなかった。

しかし、今は違う。蘇我本宗家を滅ぼして父を奪った、孝徳の帝も石川麻呂も鎌足や天智の帝でさえも居なくなつた。今この国で吾に指図できる者など誰もいないのじゃ。

吾は勝つた。もう耐え忍ぶことなど何も無いのじゃ。吾は、吾の思うように生きていく。

ふと斉明女帝の面影が浮かんだ。

吾も斉明様のように生きられるだろうか。

鬼の室(2)

大津の宮を辞去して、南へ下った。青海おしみの湖の波音を右手に聞きながら集斯は歩いていった。穏やかな夕暮れ時だ。

平和だ。平和な国だ。先の白村江の戦いでは破れたと言つものの、この国には平和が根付いている。朝廷の中の警護の兵士からして、何も無くて当たり前という顔で動いている。悪く言えば緊張感がないのだ。

右手の湖を見た。大きな湖だ。水の流れを見ると思い出されるのは百済の王都である一泗& amp; #27800; ; 《しひ》の風景だった。ゆるやかな白馬江の流れに包まれるように泗& amp; #27800; ; の都はあった。似ていると集斯は思った。百済滅亡の折には扶蘇山城の落下岩から追い詰められた宮女三千人が白馬江へ飛び込んだと聞いている。

目頭が熱くなった。

「いかんいかん、つまらないことを」と独り言を呟いた。

それにしても父の福信は、どんな思いで戦ったのか。集斯は、父の福信の事を考えていた。父を最後に見たのは百済が滅びる前であった。父は西部の恩率で出向いたが、自分は学問のために一泗& amp; #27800; ; 《しひ》に残った。

臥薪嘗胆、そんな言葉が良く似合う男だった。武骨者だが、やけに人懐っこいところがあった。その上、自分にも人にも厳しいところがあった。子供の頃には良く殴られた。

自分は学問が嫌いで武骨者で通したくせに儂には学問を求めた。

此度の新羅出兵は百済人の中でも意見が割れている。海を渡って倭国に落ち着いて八年の月日が経っている。未だに半島では戦いが治

まっていけないから、今でも海を越えて来る者達が後を絶たない。三百年以上前から高句麗・新羅・百済の三国は争ってきた。ところが唐の介入により百済高句麗は既に滅んだ。いまは高句麗復興運動に新羅兵が助力することで、唐と新羅の全面戦争に変わっている。

唐の高宗は倭国軍の介入を呼びかけている。いま倭国が介入して新羅の王都である鶏林へ向かえば十分な勝機があると思う。半島じゅうに戦線が拡大している新羅兵は帰る場所を失うのだ。小気味良いではないか。倭国が介入して新羅を滅ぼせば高宗は旧百済の地と旧新羅の地を与えると聞いているが、これが今ひとつ信用できない。新羅滅亡後、唐と倭国の対決となれば海を渡って戦わねばならない倭国が不利なのは火を見るより明らかだ。

しかし約束が守られるのであれば、百済へ帰りたい。白馬江の流れに身を委ねたい。

父の福信が暮らしたと言う岩窟むろを見てみたいと思った。幅三間、高さ一間、奥行き二間程と聞いた。父はそこで鬼となって生き、鬼として死んだ。最後は糺解くげ（余豊璋の王名）に謀反を疑われて斬られた。儂も鬼として生きれるだろうか。

しかし、百済人も大和人もみな父を悪く言う者など居ない。父あつての百済復興運動だったのだ。儂が賜爵されたのは父の功ではないか。父が生きていれば白村江でも勝っていたやも知れぬ。世間知らずの王を持った父親の無念を思うと涙が零れた。

奇策

日雄の離宮の脇の桜の木の下に老人とその息子であろうか屈強そうな若者が佇んでいる。先ほど離宮を掃除していた若者に大海人の皇子への取次ぎを頼んだのだが、未だに表われぬ。息子の方が少し焦れてきたようだ。

「近くにおられると申したではないか。」と言って、右足を踏んだ。「まあ良い。日はまだ高い。お会いできれば良いのじゃ。」と言って続けた。

「見事な桜じゃ。今が盛りじゃ。檜隈では、これほどの景色は見れんのお。これだけでも訪ねてきた甲斐があるわい。」
そう言われて若者は山の麓の景色に眼をやった。

「おお、おいでじゃ。」と老人は言つと、近づいてくる人影の方向に膝を折った。

近づいてきた人影の中の僧服姿の大海人が声をかけた。

「おひとな首名殿、久しぶりじゃな。」

坂上の直首名、さかのうえ東漢氏と呼ばれる渡来人数流の中の一当主である。

「皇子様には、ご機嫌麗しゅう。」と言って額づいた。

「まあ良い、入れ。」と言って、大海人は邸に入つて行った。

邸に入り、奥に大海人を挟むように角乗と舎人の男依が座った。

舎人の雄君と角乗の次男の角仁それに角乗の手下数名が外で控えている。

一通り挨拶が済むと大海人を見上げるように首名が口を開いた。

「皇子様には、倭姫様を娶って頂けるお気持ちがありますまいか。」

「むっ」大海人は、声にならない声を発して首名を見た。

「奇策でございます。奇策では御座いますが、謂われ無きものでも

「ありますまい。」と首名は頭を掻いた。

「姫様は、まだ三十半ばにおはします。三十半ばの女ざかりにございます。」と首名は続けた。

この翁は何を考えているのか。大海人は考えている。

「それで大后様には、何と。」と訊いた。

「やっやっ」と眼を丸くした角乗が口を挟んだ。

「大后様と吾が君がご一緒になるということは、吾が君が大君になると言うことではないか。」

角乗の言葉を避けるように首名は大海人に応えた。

「中の大兄様に婚せられる際に、姫様は仰られました。なにゆえ敵の中の大兄なのじゃ。せめて大海人様なればと。せめて大海人様なればと。これは臣と吾が家刀自しか知らぬことでございます。」しわぶきを一つすると首名は続けた。

「最後は斉明様に押し切られましたでございますが。」

「大后様の乳部の汝なればこそか。」

倭姫が仮に首を縦に振ったところで近江政庁はどう動くのか。大海人は計りかねた。

大海人の心中を見透かすように首名は言った。

「吾等東漢の者どもは、皇子のお味方でございます。今しばらく時間をお賜りますようお願いいたします。」

去っていく親子の後ろ姿を追いながら大海人は男依に問いかけた。

「お主は、どう思う。」

「吾には考えも及びませぬ。」男依が応えた。

似たような話を大海人は思い出していた。曾祖父の敏達帝が薨去したおり、帝位を狙った異母弟の穴穂部皇子が殯の宮にあった大后炊

屋姫を犯そうとした事件であつた。穴穂部の皇子の企みは敏達帝の側近の三輪君逆のために阻止されたが、この事件を契機に蘇我物部戦争が始まつた。

その戦いに勝利した蘇我氏の台頭による影響が大海人の少年時代まであつた。その蘇我本宗家を排除したのが叔父の孝徳帝であり、兄の天智と鎌足であつた。

「皇子を推載することにより、近江朝廷から百済人達を追い落としたいのでしよう。」と男依が言つた。

応神帝の時代に阿智使主に引きつれられて渡来してきた東漢氏は、雄略帝の時代に掬が活躍したと伝えられる。その後、蘇我氏が台頭してくると蘇我氏を通して大和朝廷の技術官僚として代々仕えてきた。それが近江朝廷では、百済人の風下に立たされている。

渡来人とは言いながら、もう二・三百年もこの大和の地に暮らしているのだ。遣唐使から帰つて来た一握りの者を除けば、彼らは大和人と変わらない。最新の智識技量では、百済人には適わないのである。

造るはじから崩れたという斉明帝が築こうとしたふたつきのみや両槻宮や、やり直し工事となつた孝徳帝の難波の宮。それに対し筑紫に造営した水城の技術力の高さ、石積みの技量の違いは較べるべくもない。

失敗工事でなければ、たふれこころみぞ狂心の渠などと母の斉明帝は陰口を叩かれることも無かつたであらう。

「今しばらく、様子を見るか。」呷くように大海人は言つた。
首名や東漢氏一党の動きを見ることにした。

鵜野の里（1）

平群の里を北へ向かい、俵口より生駒山に登る。人家が遠くなると山道は、獣道となった。麓から見た生駒山は春の陽射しを浴びて青く霞んで見えたが、杉木立の中の道は暗い。

清滝峠を越え、下り始めた多胡弥は人の争うような声に立ち止まった。それも女の声だ。馬の鼻息も聞こえた。

「己ら、ただでは済まぬぞ。」

見ると若い女だ。細袴をはき馬に跨って鞭を振り回している。坂の上から白髪交じりの男が馬の轡を取って引いている。女が振るう鞭は馬の頭の上を右に左に掠めるばかりで男には届かない。

馬の後ろにはその男の息子であるうか、若い男が事の次第を見つめている。更にその後ろには俵荷駄を背の両側に括りつけた駄馬の轡を持った女がいた。足元には男が倒れている。

《山賊、追い剥ぎか。山道はこれがあるから困る。》と多胡弥は周りを見廻した。既に若い方の男に姿を捉えられたようだ。

「待たれよ。何事か。」声をかけた。

驚いたように振り返った白髪交じりの男は、多胡弥が一人なのを見て取ると勝ち誇ったように微笑んで言った。

「痛い目に会いたくなくば、すつこんでろい。」

「見たところ、隠れる場所も無いんでな。」と顎を廻して言つと多胡弥は懐に右手を忍ばせた。

「何うお」と男は叫ぶと手にした四尺ばかりの棒を振り上げて襲ってきた。

棒先が振り下ろされる間に多胡弥の右手が裏拳に動いた。

「ぐうえ」と叫びながら男が仰向けに倒れた。眉間が割れて血が噴

出した。

馬の後ろにいた若い方の男が飛び出してきた。倒れている男を一瞥すると、

「この野郎」やおら殴りかかってきた。

次の瞬間に、やはり多胡弥の右手が裏拳に動いた。

「ぐわあ」と今度は横つ飛びに坂道に崩れた。両手で押さえた若い男の鼻筋から血が滴り落ちた。

多胡弥が坂道を下って行くと駄馬の轡を取っていた女は山道を反れて熊笹の中を谷底の方へ逃げ出した。

馬から下りた女は、道端に倒れていた男を抱き起こした。

「連れの者か。」多胡弥が聞くと、女は肯いた。

「息はあるようだ。」と多胡弥は女から男を受け取ると背中に廻って気を入れた。

「うっ」と呻って男は息を吹き返したが、歩くことは難しいようだった。女は男を自分の乗っていた馬に乗せると山を降りることにした。

「何処まで行かれますか。」と男を乗せた馬の轡を取りながら女が聞いた。

「鵜野の里まで。」やはり駄馬の轡を取っている多胡弥が応えた。

「鵜野の里は我が家のあるところですよ。鵜野の里のどちらまで。」

「宇努の連殿の館まで参ります。」

「あら、お隣ですね。お隣の佐良良の家の勢津と申します。」勢津と名乗った女は、名乗った後で心臓がどぎまぎしてきた。この国では年頃に成った女が男に住まいと名を教えれば、それは夜に男が女の元を訪ねてきても良いと言うことを意味していた。

勢津は耳が熱くなるのを感じた。赤くなった耳をこの男は見つけただろうか。高鳴る心臓に頬を染めると俯いた。

鵜野の里（2）

「何としても、新羅出兵は抑えねばならぬ。」宇努の連うのむらじ庭琴は言った。

新羅の馬飼、宇努の連の邸である。

欽明の帝の代に外交使節として倭国に派遣された新羅王子金庭興の裔である。新羅が任那を併合するに及んでその言を左右した外交の不実を欽明帝に咎められた金庭興は、そのような不徳義の国には帰りたくないとの口実で倭国に止まったのである。それ以来、新羅への倭国側情報の連絡施設としての役割を担っている。

「文武王より、できる事は何でもせよと言ってきておられる。」
「できる事とは。」多胡弥が尋ねた。

「黄金三百両が届けられている。これに転ぶ者は居らぬだろうか。」
現在の近江政庁の有力者の中に、黄金に転ぶ者があるだろうか。多胡弥には思いつかない。

「大海人様なれば、もしや心当たりがあるやも。」多胡弥は言った。
「ふむ。既に大海人様に心の内を見せている者以外でじゃ。」

《やはり目の前にいる男では役不足のようだ。やはり儂がやるしかないようだ。》と宇努の連は考えている。

「それから、金庚信將軍が倒れられたようだ。」と、宇努の連は続けた。

「それは、真で。」多胡弥が尋ねた。

「倒れられたとしか聞いておらぬ。一月ほど前のことじゃ。」
多胡弥は鼻の奥が熱くなってきた。父とも祖父とも慕う庚信將軍が倒れた。新羅人だけでなく加耶人にとつても救国の英雄である。

加耶を併合した新羅は、加耶の王族を新羅の貴族として待遇した。
金庚信は、その加耶王家の末裔である。新羅の先の武烈王が政治と

外交を担当し金庚信が軍事を担当して今の新羅という国を動かしてきた。

母の遠縁にあたる庚信將軍に預けられることで多胡弥は金城の花郎徒に入れたのだった。

多胡弥が生まれたのは南加耶の金海である。金官加耶あらしひのかやと大和人が呼ぶ地域である。何故そう呼ぶのか多胡弥は知らない。

多胡弥は、倭系百濟人の父と加耶人の母から生まれた。

倭国語が堪能なことから、二年前に高句麗が滅んだ後に倭国へ送られた新羅使金東巖一行の通訳としてこの国へやって来た。

新羅使一行は倭国との友好を謳い唐との戦鬪の為、倭国への侵略の意思の無いことを表明した。倭国側はこれを歓迎し新羅王に船一艘を贈った。また内大臣の鎌足からは金庚信將軍に対して、やはり船一艘が贈られた。その返戻のひとつとして、多胡弥が新羅側への連絡役として残されたのである。その日から多胡弥は鎌足邸の食客のひとつとなった。

天智より死期の迫った鎌足に対して大織冠と藤原の姓を与えられた際に使者として訪れた大海人に、鎌足より奇貨として多胡弥は託されたのである。

「お隣の佐良良殿がお見えです。」外からこの家の家刀自が呼びかけた。

部屋から出て行った宇努の連は、すぐに戻ってくると言った。

「お主に用があるそうじゃ。」

鵜野の里（3）

娘の命の恩人だということでは半ば強引に多胡弥は佐良良の邸に連れてこられた。下にも置かぬもてなしぶりである。説き伏せられて夕餉を頂くことになった。百済の馬飼、佐良良の造善那みやうこ。やはり欽明の帝の代に百済の聖明王より送られた良馬の世話係りとして、この地にやってきた百済人の裔だという。

ここ生駒山の河内側の麓には広大な牧が広がっている。馬飼も宇努の連や佐良良の造だけでなく何軒にも及ぶと言う。

「海の向こうの事は知らぬが、ここでは百済も新羅も関係ねえ。」と善那は続けた。

「うちの家刀自とお隣の家刀自は、大の仲良しよ。向こうは新羅の王族の出らしいが、こちらら百済の馬飼よ。塩だつて醬おしひだつて借りたり貸したりの仲だ。何の違いもありやしねえ。」酔いが廻ってきたのか、声が大きくなった。

確かにその通りだと多胡弥は思った。海を越えて倭国へ上陸した時点で戦の無い国へ着いたと思った。昔から東方に常世の国があると伝えられている。神仙が住む三神山があるとも聞いた。

ここ大和の国は、平和ということでは将に理想郷ではないか。

「大海人様の下で働いているのだと。こう見えても吾が家は、佐良良姫様の乳人あめのであるぞ。何かの縁があるのであろう。のう。」脇にいる勢津を指して膳那は言った。

「この子は佐良良姫様の乳姉妹じゃ。お主は、えー」

「二月ほど姫様より早い生まれでございます。」このやり取りは親子の間で何度も繰り返されているのか、勢津はびしゃりと言った。

善那は今度は、多胡弥の方へ顔を向けると言った。

「馬飼は、良い仕事だぞ。まだまだ、この国では馬が足りない。馬は何処へ持っていても引つ張りだこだ。」

何か意味ありげな言い方をした。そして続けた。

「隣に馬の算段に来たのであれば、その必要は無い。儂が大海人様の下にお届け致すまでのことよ。のお。」

「いい加減なことをお言いでないよ。まったく酔っ払っちまって、しょうがないね。」と家刀自に促されて、善那はふらつく足で出て行った。

「ごめんなさい、父上の悪い癖で酔うと気が大きくなるものだから。」と勢津が言い訳を言った。

馬は軍馬や馱馬そして物資の輸送に貴重な存在であったから、朝廷の管理下にあった。一匹や二匹の誤魔化しはできても多くの頭数を動かすことは出来ないのである。

勢津は周りを片付けると床をつくり出て行った。多胡弥は横になると思いついていた。峠道を下って来る中で急に黙り込んだ勢津の仕草。小柄だが目鼻立ちの整った瓜実顔。何よりも馬上で鞭を振り回していた気丈さ。

《惚れたのか》と思った。

佐良良の邸の前で、別れ際の挨拶に絡み合った瞳と瞳。

《あれを、目交つまぐあと言つのか。》

寝返りを打ち横になった。

すると夜着に着替えた勢津が入って来て多胡弥の脇に立った。多胡弥が勢津の手を取ると、勢津は多胡弥の胸に入って来た。

「儂で良いのか。」多胡弥が聞いた。

勢津は多胡弥の胸の中で頷いた。

神人

「物事を見るには明哲という眼で見なければなりません。一木一草にも神霊や仏性が宿ると申すが、それだけでは足りない。木や草がどのような所に植えられればどう伸びるのか、周りの草木に囲まれてどのように生長していくのかを知らなければなりません。木の葉の動きで風の流れを読み、虫の動きで雲の流れを読む。釣り上げられた魚は四半時も生きてはいらぬが、同じ水の中に棲む蛙にとつてはどうでも良いことじゃ。天の気・地の気・人の気が重なり合うと物事は成るといふ。それさえも明哲の眼を持って見れたればこそじゃ。」と小角は続けた。

「天の道を見てその通りに実行する。それが全てでございます。天の本質と人の本質は変わりませぬ。天の機と人の機を合わせることので正しい有り方が得られるのでございます。天が殺機を発すると天体が運行し、地が殺機を発すると龍が雲に昇り、蛇が地上に這い出てきます。人が殺機を発すると自然界に大きな変化が起き。天と人の殺機が同時に発せられると全てが整います。天は生み、天は殺す。これが道の理というものであります。万物は天地を盗んで存在しております。人は万物を盗んで存在し、万物もまた人を盗んで存在しております。この三盗が適切に行われていけば、天地人は安定するのであります。」小角は諳んじているのか一気に喋ると大海人を見た。

「それは道教の奥義書、陰符経であるな。」そう大海人は言ったあとで、市井の一行者がどれ程の智識を持っているのか訝った。

「師である道昭殿の受け売りでございます。」と小角は頭を掻いた。

「ほう、道昭殿は道教にも見識があるのか。」百済が滅んだ年に遣唐使から帰国した僧道昭の名は大海人も聞いています。

「確か玄奘三蔵という高僧のもとで修行して来たと聞いているが。」
と大海人は続けた。

「さよう、御仏の道だけでなく神仙の道にも明るうございます。」
と小角は続けた。

「今でも飛鳥寺に設けられた禅院にて瞑想の日々を過ごされておいででございます。身共のような者にも声をかけて下さいます。しかし、仏の道は儂には遠うござります。この国には古来より天神地祇がおわします。西の国の神々とは違います。儂はこの国の御仏を探しております。」小角は自嘲気味に言った。

《危うい》大海人は思った。

《この男は神に成るつもりなのか。修行により神仙となれば、それは現神ともなるではないか。この国の現神は大君と太后だけで好いのだ。神仙の道と我国の仏を考えるのは大君の役割だ。それに、この男の智識の出所は遣唐留学僧からではないか。朝廷が遣唐使を派遣するのは、朝廷や大君のためであって、下賤の者のためではない。》そう考えると、大海人の気分は滅入ってきた。

仙人を古くは遷人と書いた。この世から生きてままで天界に遷るからである。上仙は仙薬により不老長寿と天界への入り口を手にすることができ、下仙は死により天界へ向かった。これを尸解仙という。仙人は同時に神人であり特異な能力を持つとも考えられていた。

仏教では解脱を理想としていたが、中国の民衆信仰である神仙道と習合することで解脱することで神人とも成ると考えられ区別が曖昧になっている。

二人の話が途切れると角乗が口を挟んだ。

「もう10年以上も前になります。仲間内から金剛峯に誰かが入り込んでいます。人影が見えたので追って行ったら見失ってしまった。」

などの知らせが何度もありましたが、一向に捕まらない。そこで、一度見つけて懲らしめてやろうと網を張っていたんでさ。なにせ朱丹の穴でも探られるとやっかいなもんで。」

「それである時、金剛峯の岩屋から経を読む声があると云うので仲間内七・八人で囲んだんでさあ。それで、出てきやがれ。そこに居るのは解かってんだぞうってね。それで、どうなったと思いやす。」と角乗は、大海人を見つめた。

「それで、どうなったのだ。」大海人が訊いた。

「ふん縛られたのは、あつしらの方で。」と言つと角乗は頭を掻いた。

「それは、どういうことだ。」興味ありげに大海人が訊いた。

「出てきた御師様に啖呵を切つて、それつてんで囲んだら喝を入れられましたね、みんな動けなくなつちまつたんでさあ。金縛りつてんですかねえ。身体も動かなければ口もきけねえ。出てくるのは脂汗で。四半刻もそのまま。術を解いて頂きやしたが。こりゃあ只者じゃねえてんで、弟子にさせて頂きました。」と角乗は大海人を見た。

「ほほお、その術とやらを是非にも見たいものじゃ。」と大海人は小角を見た。

「座興では御座りませぬ。危のうござります。」と言つて小角は手を振つた。怪我人でも出たら困るとのことだった。

小角が辞して行った後の角乗の邸で大海人は考えていた。

《あれが役の行者と評判の男か。吾が大君ならあの手合いを許すことは出来ぬであろうな。やはり、この国で神と呼ばれて良いのは大君だけだ。それでなければ朝廷が立ち行かぬ。修行で仙人になれるかどうかは別としてもだ。それに遣唐使が持ち帰つた最新の智識は、

大君とその朝廷の物では無いか。》
何とかしなければならぬと考える大海人の脳裏には別の思いが湧いてくる。

《今の吾にはどうでも良い事ではないか。大友が考えることである。義父として叔父として忠告してやらぬでもないが、時期が悪い。何れ、そのような時が来るのか。》

大友と十市の顔が浮かんできた。

《因果なものじゃ。お前たちが悪い訳では無いのにお。》

謀反

吉野の桜も風に飛ばされ、谷の流れをつたって吉野川に流れ込んでいます。初夏の陽射しが眩しくなってきました。

角乗の邸で大海人は角乗の三男の角正と双六に興じていた。盤上に白と黒の駒を置き左廻りに動かしていく。双六の目の数だけ進み、相手の駒を取っていく。相手の駒を取り終えたら勝負ありである。と、その時角乗の次男の角仁が入ってきて言った。

「離宮の方へお客様がお見得です。巨勢臣徳麻呂様と名乗られておいでです。」

巨勢臣徳麻呂、大友の皇子を支えている五人の重臣の一人である御史大夫の巨勢臣人の従兄弟である。

挨拶が済むと徳麻呂が口を開いた。

「東国と出雲へ徴兵使が派遣されました。」

「大后様のご意向は、変わられたのか。」大海人が尋ねた。

「いえ、大后様のご意向とは別にございます。表向きは先の天智の帝の山稜建設ということでございます。」徳麻呂が言った。

「正丁三人につき一人を軍丁いくばくやとします。軍丁十人につき馬が六頭の徴発となります。」徳麻呂の脇に控えていた丹比長目と名乗った男が口を開いた。

「徴用された者は、30日分の食料にあたる糶ほ6斗、塩2升、それに武具、鍋釜の類まで用意しなければなりません。」やはり徳麻呂の脇に控えていた穂積贄古が言った。

「東海道より二万、東山道より一万、山陰道より八千、都合三万八千を徴発し、その後坂東でも徴発して行くとのことでございます。」と徳麻呂は言って、大海人の顔を見た。

「皇子、六月の終わりに兵の徴発が終わります。そうなつてからでは間に合いません。吾に考えがございます。」と徳麻呂は言つて、再び大海人を見た。

「皇子には、難波の宮へ入つて頂きます。難波には阿倍と大伴がおります。共に近江朝廷おうみのみかどには距離を置いている大族です。阿倍と大伴が立てば一萬の兵は、すぐにも集まりましょう。そこで吉備と筑紫からの援兵を待ちます。さすれば近江方を力でねじ伏せられます。」と確かめるように大海人の瞳を覗き込んだ。

《確かにありえない話ではない。》と大海人は思った。

《阿倍は倉梯麻呂が孝徳の帝の元で左大臣を務めた後は斉明・天智の元でいいように使われてきた。不満が爆発してもおかしくない。大伴もやはり孝徳の帝の元で右大臣を務めた長徳いらい距離を置かれている。》

「有馬の皇子の一件以来、阿倍は深く恨んでおります。また先の百濟救援の戦の折は、引田の比羅夫殿は無残にも討ち死にしております。皇子が立てば必ず阿倍は立ちます。」徳麻呂は語気を強めた。

孝徳の帝の子である有馬の皇子にとって阿倍は母の里であつた。孝徳の後に重祚した斉明の帝のもとで阿倍は蝦夷征伐へと追いやられた。斉明の後の皇位継承に係わる天智にとって阿倍は邪魔な存在であつた。そして雄族の阿倍氏の船団が東北の蝦夷征伐に赴いている間に有馬の皇子は罪に落とされて殺された。

「皇子、この国の民を救ってください。」穂積贄古が語尾を詰まらせて言つた。

「皇子、皇子の下で働きとつございます。」丹比長目も声を詰まらせた。

大海人は隣の男依を見た。男依は頷いて立ち上がると扉を開けた。

扉の外には角乗が控えていた。

「訊いたか。」大海人が角乗に問いかけた。

「畏まつてござりまする。」と応えた角乗が外で控えていた十人程の手下に合図した。一気になだれ込んだ角乗の手下は三人を締め上げた。

「なつなつ、何事で」徳麻呂が叫んだ。贄古と長目は、目を合わせると俯いた。

「お主ら大方、大友の村主にでも弱みを握られているのだろう。」
大海人が言った。

大海人を見つめていた徳麻呂の顔がゆっくり崩れ落ちた。

「何ゆえ、お解かりで。」徳麻呂が口の中で独り言のように言った。
「吾は長年、鎌足殿や大友の村主のやりようを見てきた。」そして大海人はつなげた。

「汝は何故、巨勢を動かすと申さなかったのか。」

大海人は角乗に向かって告げた。

「口書きを取り、倭京の留守司へ引き渡すように。」

「畏まつてございます。」角乗が合図すると三人は邸の外へ連れ出されて行った。

「危のうござりましたな。」男依が言った。

「これからだな。」大海人が応えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1908g/>

白虎と朱雀

2010年10月12日12時10分発行